

漢字

一 1 救急車を呼ぶ。

2 他と比較する。

3 携帯電話にかける。

4 余計なことを言う。

5 警報が鳴る。

6 近隣の消防署。

7 雰囲気が違う。

8 延焼の危険はない。

9 猛烈な圧力がかかる。

10 及第点をもらう。

11 操作盤の取り扱い。

12 頭の隅に浮かぶ。

13 潤んだ目で見上げる。

14 お留守番をする。

15 挨拶をする。

16 迷惑をかける。

17 丁寧なお辞儀。

二 1 新興〔しんこう〕住宅地に住む。

2 懐〔なつ〕かしさが込み上げる。

3 友達を伴〔ともな〕って行く。

4 点火した途端〔とたん〕爆発した。

5 悪気〔わるぎ〕はない。

6 高い天井〔てんじょう〕を眺める。

7 素早く靴を履〔は〕く。

8 慌〔あわ〕てて直す。

9 梯子を担〔かつ〕ぐ。

10 交替〔こうたい〕で勤務する。

11 何度も繰〔く〕り返す。

12 前回の雪辱〔せつじょく〕戦。

- 13 箱を抱〔かか〕える。  
14 厳しい口調〔くちよう〕になる。  
15 吸い殻〔がら〕が山になる。  
16 火種〔ひだね〕が残る。  
17 息子〔むすこ〕に言う。

### 語句

一 野次馬〔火事や事故などの現場に興味本位で集まってくる人。〕

2 雪辱〔恥をそそぐこと。〕

【補足説明】 2 「雪」はそそぐの意。

二 1 びっくりして息をのんだ。

2 頭からずつと離れない。

3 ひと声かけてくれたらうれしかった。

4 寝返りを打つ。

三 1 ふと我に返ると、とんでもない場所にいた。

2 取り返しがつかない事態になることだけは避けるべきだ。

3 自分の愚かさを指摘され、返す言葉がない。

【補足説明】 3 は、①相手に意見や反論をする余地がない。②あきれてものが言えないの意。本文では①の意で用いられている。

### 要点の整理

第一段落 初め〜二八〇・下3

高校卒業後もずっと三人はア「友達」だと思っている寿々は、休みの日は三人でイ「会いたい」。仕事が忙しくてやつとウ「連絡」できたとき、えりと友香がエ「新しい」女友達と温泉に行つたのを知ってショックを受ける。

第二段落 二八〇・下5〜二八五・下13

仮眠室でもオ「二人」のことが頭から離れない寿々は、カ「火災」現場で満足に仕事ができなかった。「おまえはキ「社会」に出たんだ。ク「学生」じゃないんだ。」と、中隊長から厳しく注意され、頭を下げるしかなかった寿々は、訓練に加えて自宅でケ「自主トレ」を始めた。

第三段落 二八六・上2〜二九〇・下7

二度目の火災現場で、一線から<sup>コ</sup>「外された」と思つて悔しかった寿々は、<sup>サ</sup>「子犬」を助ける。署に戻つた寿々は消防署の<sup>シ</sup>「制服」を着た女性から食事に誘われる。二日後、火事を起こした一戸建ての主婦と小さな男の子から子犬を助けたお礼を言われた寿々は<sup>ス</sup>「感激」して目が熱くなつた。

#### 第四段落 二九〇・下9〜終わり

帰宅して友香からの電話を受けた寿々は、ここ数日、友香やえりのことを一度も思い出さなかつたことを<sup>セ</sup>「不思議」に思う。自分のやるべきことを必死でやっているだけなのに、「すずは<sup>ッ</sup>「先に」どんどん<sup>ッ</sup>「大人」になつていくね。」と言われ、やつと<sup>チ</sup>「出口」に立てた気がした。

#### ●主題

高校卒業後も三人はずつと友達だよと<sup>ア</sup>「約束」した寿々は、<sup>イ</sup>「消防士」になつてからも友香やえりのことが頭から<sup>ウ</sup>「離れない」。最初の現場で思うように仕事ができず、中隊長から厳しく注意され、<sup>エ</sup>「訓練」に加えて自主トレを始める。二度目の現場で寿々は子犬を助ける。署に戻つて制服の女性から<sup>オ</sup>「食事」に誘われたり、火事を起こした家の主婦と小さな男の子から助けた子犬の<sup>カ</sup>「お礼」を言われたりという体験を通じて、少しずつ大人になつていく寿々の姿を描く。

#### 内容の理解

一エ

二何もかもがおかしくて、ささいな話でも声をそろえて笑つていた（二十九字）

三ウ

四1えりと友香が、それぞれの友達を伴つてドライブに行った話（二十七字）

2ア

五ウ

六イ

七何もできないくせに自分の力を過信していたのだ。（二十三字）

八エ

九ウ

十イ

十一高校時代からの卒業（九字）

## 【読解のポイント】

【一】アは「自分の気持ちを落ち着かせたかった」、イは「休日も仕事のことから頭から離れず」が違う。「それ（仕事のことを思い出す）よりも休みの日は、やっぱり友香とえりに会いたい」のである。ウのような「危機感」はない。

【二】「高校のときの、何もかもがおかしくて、ささいな話でも声をそろえて笑っていた楽しさ」（二七八・下3）から三十字以内で適切な箇所を抜き出す。

【三】「わかっていながら余計にショックなのだ。それぞれの新しい女友達と出かけたなんて。それなら男の子と出かけてくれたほうがまだよかった」（二八〇・上5）から、ウが正解であるのがわかる。

【四】1「頭からずっと離れない」「頭がいっぱいになってしまふ」という似た表現に着目する。  
2 部屋の雰囲気や頭がいっぱいになったわけではないからエは違う。イは、頭がいっぱいになった結果「みじめ」だったのだから違う。ウは、「どうして私を誘ってくれなかったのだろうか」という二人への不満が、「それぞれの友達を連れていくなんて、私を抜いた新しいグループができそうだ」という危惧を経て「どうしてわかってくれないのだろう」へとつながる不信感であるが、結局は「二人には悪気はないのだからしかたない」と思おうとするのだから違う。結局「私を抜いた新しいグループができそうだ」と「取り残された気持ち」が湧いてきて悲しくなる」のだから、アが正解。

【五】警報を聞いて「寿々は飛び起きた」（二八一・上13）以降は、現場に向かう準備と車内での様子、そして現場に到着した直後のことしか描かれていないので、エは違う。「実際の火災現場」は「少し先にアパートがあり、二階の左端の窓から白い煙が出ている」（二八一・下12）だけであり、現場の様子に緊張しているわけではないので、アは違う。イの内容はどこにも描かれていないので違う。結局、そういうことを考える余裕もないほどまごついていたというのである。

【六】「寿々が感じた怖さは、いざ現場に出てみたら自信がなかったことに原因がある」（二八五・上7）とある。ア「もどかしさ」、ウ「緊張」、エ「責任」を感じる余裕はないのである。

【七】「何もできなくせに自分の力を過信していたのだ。そう思うと恥ずかしくてたまらなかった」（二八五・上8）とある。

【八】直前の「一本の記憶の綱がずるずる引き出されるが、寿々はすぐ、あの熱い煙と生きていくオレンジ色の炎を思い出す。今、自分がするべきことは何か」（二八五・下9）から、正解が導かれる。ウ「決別しようとする悲壮な思い」は、言いすぎである。

【九】直後の「本気を出してやっているつもりだが、まだまだということを身にしみて感じる。

今回も早く消火できた火事だったが、寿々自身は何もできていない。勉強することが山ほどある」(二八八・上3)から、正解が導かれる。

十 夕バコの不始末から火を出した主婦に対して厳しい口調で対応していた中隊長が、「優しい顔に戻って寿々に笑いかけた」(二九〇・下5)とあることから考える。「もつと頑張れよ」には「これから今の調子でさらに頑張れ」という思いがこめられている。

十一 初めて現場に出て失敗した寿々が、中隊長からこつびどく叱られた場面がある。寿々がえりや友香とのことを思っただけで仕事に集中できないのを「おまえ、よくぼんやりしているだろ」(二八三・下9)と指摘され、「おまえは社会に出たんだ。学生じゃないんだ。自分の責任を果たして金をもらおう立場になったんだ。自分の仕事に全力を尽くすのは当たり前のことじゃないか」(二八四・上6)と言われる場面である。このときの「頭を一撃された感じ」(二八四・上13)が、それ以後の寿々の頑張りを引き出すきっかけとなった。久しぶりの友香からの着信に「ここ数日、友香やえりのことを一度も思い出さなかった。あんなに気にしていたのに不思議だ」(二九〇・下15)と、寿々自身が思うほどの頑張りだった。電話で話した友香も「まずは先にどんどん大人になっていく」と感心するほどであった。「入口」ではなく「出口」に立てたとあるので、解答は「高校時代からの卒業」となる。